

ディエゲーシスからミメーシスへ： 虚構言語における状況定位表現の歴史的変遷(5)：) 擬似ミメーシスとしての書簡体小説（ゲーテの『若きヴェルターの苦悩』）

阿部, 吉雄
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5350>

出版情報：言語文化論究. 13, pp. 65-78, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



ディエゲーシスからミメシスへ

虚構言語における状況定位表現の歴史的変遷

(5) 擬似ミメシスとしての書簡体小説（ゲーテの『若きヴェルターの苦悩』）

阿 部 吉 雄

近代における物語芸術の発展史はその形式面から見れば、語り手が筋の出来事を報告するディエゲーシスから、作中人物の意識や知覚を通して作品世界が描写されるミメシスへの漸進的移行であり、この歴史的変化が筋の時点・地点を指す状況定位表現の選択に反映し、語り手を基点とする遠隔指示（あの時・あそこ）から作中人物を基点とする近接指示（今・ここ）へ移行するという我々の仮説は、本論の(1)～(4)における調査によって裏付けられた。¹⁾また状況定位表現の選択から逆に作品のディエゲーシス性／ミメシス性の度合を測ることができた。

今回はゲーテの『若きヴェルターの苦悩（Die Leiden des jungen Werther）』（1774）を扱う。この作品は18世紀に爆発的に流行した書簡体小説の一つであり、英国のサムエル・リチャードソンの『パミラ』（1740）、『クラリッサ』（1747）、『チャールズ・グランディソン』（1753）、フランスのジャン・ジャック・ルソーの『新エロイズ』（1761）およびピエール・ショデルロ・ド・ラクロの『危険な関係』（1782）などの系譜に属する。ドイツでは他にゾフィー・ド・ラ・ロッシュの『フォン・シュテルンハイム嬢』（1771）やルートヴィヒ・ティークの『ウィリアム・ロヴェル』（1795/96）がある。この形式が好まれた理由は、事件の渦中にいる主人公の内面を詳細に、また時間を置かずに報告することが可能だからである。²⁾この現象を物語芸術の発展史に関する我々の視点から考察することが本論の目的である。

上で我々は物語芸術の発展史をディエゲーシスからミメシスへの移行と規定した。虚構的ディエゲーシスは非虚構的ディエゲーシス（通常言語）の構造に倣い、陳述主体である語り手が陳述対象である作品世界について報告する形式であり、そこで用いられる過去形は語り手から見て筋の時点が過去に位置することを意味する。語り手の存在が徐々に希薄になり、語り手が人格的存在である語り手の言葉から物語芸術における機能的媒体に変容することによりミメシスが生まれる。この歴史的展開に対し書簡体小説の構造はむしろ逆行である。通常の形式の小説における読者というテキストによって想定された観念的存在と異なり、書簡体小説では主人公の友人や家族など具体的な宛名人に向けて語られる。それにより言語構造における陳述主体としての語り手（手紙を書く主人公）の存在はより明確になる。『ヴェルター』では総194ページのうちタイトルと同名の主人公の手紙からなる部分150ページにおいて³⁾、宛名人の名前および宛名人を意味する du/Sie/ihr「君／あなた／君たち」など2人称の人称代名詞が423回（0.4ページ毎）、主人公と宛名人を含意する wir「我々」など1人称複数形の人称代名詞が75回（2.0ページ毎）使用される。また手紙を書く主人公が自らの語る行為に言及することも61回（2.5ページ毎）におよび、同

じゲーテの作品である『マイスター』の75回（13.4ページ毎）や『親和力』の21回（19.9ページ毎）と比べても明らかに高い頻度を示している。⁴⁾さらに『ヴェルター』は主人公の手紙を編者が整理し出版した形式を取っており、主人公の最後の様子は主人公の手紙を交えた編者による3人称形式の語り「編者から読者へ」で報告される。しかしこの編者はそれだけにとどまらず、作品の序文ならびに主人公の手紙からなる1人称形式の部分における注⁵⁾という形で読者に直接語りかける。編者による読者への2人称の人称代名詞や *der Leser* 「読者」という語を用いた呼びかけは12回（3.7ページ毎）、編者と読者を含意する1人称複数形の人称代名詞の使用が12回（3.7ページ毎）、そのうち主人公を *unser Freund* 「我々の友人」と呼ぶのが3回、編者が自らの語る行為に言及することが7回（6.3ページ毎）ある。また3人称の語り手である編者が自らを *ich* と呼ぶのが9回（4.9ページ毎）である。ゲーテの上記の2作品（3人称小説）と比べると、編者が語るこの3人称形式の部分でも語り手の存在がより強調されている。

このように書簡体小説は陳述主体による報告というディエゲシスの性格が非常に強い。さらに手紙という形式ゆえ現在形や現在完了形の使用が多い。地の文における語りの時制である過去形からの時制交代は194ページ中144ページにおいて認められ、特に主人公の手紙の部分では発話や思考を表わす直接話法だけで占められるページを除けば、時制交代がないのは数ページにすぎない。頻度が高いだけでなく、個々の時制交代における現在形や現在完了形の使用量も1文～数文にとどまらず、数段落～数ページにおよぶことも珍しくない。テキスト言語学者のハラルト・ヴァインリヒはその著書『時制』において種々の時制の機能を時間的な意味ではなく、言語情報の発信者が受信者に対して求める受信態度によって規定し、「説明の時制 (*der besprechende Tempus*)」と「語りの時制 (*der erzählende Tempus*)」に分類している。説明の時制には現在形・現在完了形・未来形などが属する。

説明された世界 (*die besprochene Welt*) の時制群が用いられる代表とみなしてよいと思われる例として、戯曲の対話、政治家の覚書、社説、遺言状、学術的報告、哲学的エッセイ、法律上の注釈、さらにはあらゆる種類の儀式的・儀礼的・遂行的発話などがある。

この種の陳述において話し手は緊張し、その発言は研ぎ澄まされている。そこで問題になっている事柄は話し手に直接関わるものであり、聞き手の方でも他人事ではないという身構えで受け止めてほしいからである。話し手と聞き手は積極的に関与させられる。彼らは働きかけ、またそれに反応しなければならない。そして発言は1つの行為である。すなわち関与している2人の状況に多少なりとも変更を加え、その2人に多少なりとも義務を負わせる行為である。⁶⁾

語りの時制には過去形・過去完了形などが属する。

他方、語られた世界 (*die erzählte Welt*) の談話状況とみなしたいのは例えば次のようなものである。青春時代の話、狩猟冒險談、自作の童話、敬虔な聖人伝、極めて芸術的な短編小説・歴史記述・長編小説、さらには政治的会議の経過についての新聞記事も

この中に含めることができる。(中略)我々は世界を語りながら、世界に対して距離を置くことができる。我々が世界を語る場合、語りのためにあらかじめ準備されている言葉による信号、とりわけ語りの時制を利用する。言語におけるこの時制の機能は、ある伝達の聞き手にこの伝達は物語にすぎないと知らせ、その結果聞き手がある平静さをもって聞けるようにすることである。⁷⁾

語られた世界について「聞き手がある平静さをもって聞ける」というヴァインリヒの説明に無条件で同意することはできないが、説明の時制である現在形や現在完了形によるテキストにおいて発信者や受信者の占める比重が、語る時制である過去形や過去完了形によるテキストにおけるそれよりも大きいという認識は、物語芸術における言語表現を調査対象とする我々にとっても受け入れることが可能である。書簡体小説では現在形や現在完了形の多用により、出来事の中で体験する主人公ではなく、その体験を手紙で報告する主人公やその宛名人の存在が通常の形式の小説における語り手や読者の存在以上に強調される。

説明の時制である現在形や現在完了形が多用される書簡体小説も、その中心的な部分は語りの時制である過去形や過去完了形を使用する。しかしこれは手紙という形を取りながらも、結局は小説(物語)という自らの存在様式に従わざるをえないゆえの自己矛盾ではない。ヴァインリヒは過去の事柄の報告で現在完了形と過去形が併用される例として歴史記述を挙げている。

ところで我々皆と同様、歴史記述家は過去に対して二重の関係を持つが、このことが顕著に現われるのは彼が歴史記述家としての役割を意識する時である。彼は一方で過去の事柄を物語る者であり、歴史の語り手と呼んで差し支えない。物語ることのできない者は歴史家として劣っている。しかし歴史記述家は同時に科学者でもある。過去を語るだけで満足するのではなく、過去を理解し、解明し、解釈し、教えたりしようとする。これを一言で言えば、彼は過去を説明しようとするのである。歴史記述はすべて、語ると同時にまた説明も行うという2つの面を持っている。したがって歴史記述は時制に関しても両方の時制群を用いる。⁸⁾

書簡体小説の語り手(手紙を書く主人公)もまた「過去の事柄を物語る者」にとどまらない。彼／彼女が報告する過去の事柄は同時に自らの現在と未来に「直接関わる」ものであり、その意味では歴史記述家以上に切実な問題である。『ヴェルター』では1771年5月4日から1772年12月20日までの具体的な日付や⁹⁾、主人公の遺した手紙を読者に紹介する編者の設定など、事実性(非虚構性)を感じさせることを追求しているとさえ言える。

書簡体小説のこのような特性を踏まえ、以下では『ヴェルター』における状況定位表現を調査する。

jetzt/nun-hier 対 damals-dort

筋の時点を示す状況定位表現の近接指示 jetzt/nun「今」と遠隔指示 damals「あの時」のバリエーションのうち、『ヴェルター』において我々の調査対象域である過去形による

地の文・間接話法・体験話法で用いられているのは *jetzt* およびその異形 *jetzo*, *nun* およびその異形 *nunmehr* のみであり, それぞれ計数の対象とした。*damals* およびその形容詞形 *damalig* は現在形や現在完了形の文で用いられていたり, 筋の現時点よりも以前の時点を示しているため計数していない。また筋の地点を示す状況定位表現の近接指示 *hier* 「ここ」と遠隔指示 *dort* 「あそこ」については, *hier* およびその形容詞形 *hiesig* と派生語 *hierher* 「ここへ」, そして *dort* が調査対象域での使用が認められる。「あちこち」の意の *hier und da* の *hier* は計数していない。

次の表は本論の(1)～(4)で扱った7作品および今回の『ヴェルター』におけるこれらの状況定位表現の使用回数／使用頻度を作品の成立年代順に示したものである。*jetzt/nun/hier* が近接指示, *damals/dort* が遠隔指示である。(パリエーションが見られるものも *jetzt* 等などの等を省略する。)

	<i>jetzt</i>	<i>nun</i>	<i>hier</i>	<i>damals</i>	<i>dort</i>
『ジンプリチシムス』					
総962ページ	117(8.2)	342(2.8)	89(10.8)	124(7.8)	72(13.4)
〈695ページ〉	27(25.7)	218(3.2)	7(99.3)	105(6.6)	17(40.9)
『ヴェルター』					
総194ページ	30(6.5)	51(3.8)	50(3.9)	3(64.7)	14(13.9)
〈152ページ〉	3(50.7)	16(9.5)	7(21.7)	0(∞)	2(76.0)
『マイスター』					
総1002ページ	98(10.2)	402(2.5)	123(8.1)	47(21.3)	30(33.4)
〈554ページ〉	15(36.9)	240(2.3)	32(17.3)	18(30.8)	7(79.1)
『親和力』					
総417ページ	56(7.4)	167(2.5)	57(7.3)	7(59.6)	32(13.0)
〈279ページ〉	22(12.7)	117(2.4)	24(11.6)	0(∞)	10(27.9)
『緑のハインリヒ』					
総1319ページ	351(3.8)	720(1.8)	246(5.4)	47(28.1)	137(9.6)
〈1148ページ〉	272(4.2)	548(2.1)	89(12.9)	26(44.2)	57(20.1)
『アメリカ』					
総413ページ	202(2.0)	119(3.5)	260(1.6)	23(18.0)	77(5.4)
〈274ページ〉	105(2.6)	109(2.5)	93(2.9)	1(274.0)	9(30.4)
『審判』					
総335ページ	236(1.4)	71(4.7)	185(1.8)	15(22.3)	67(5.0)
〈178ページ〉	113(1.6)	55(3.2)	44(4.0)	0(∞)	14(12.7)
『城』					
総521ページ	235(2.2)	179(2.9)	305(1.7)	72(7.2)	196(2.7)
〈226ページ〉	110(2.1)	112(2.0)	93(2.4)	0(∞)	16(14.1)

左端の各作品名の下は本来の総ページ数, もう1段下の括弧内の数字は総ページ数から作中人物の発話を表わす直接話法の割合分を減じたページ数である。¹⁰⁾ ページ数についてこのような補正を行うのは, 直接話法が我々の調査対象域に属さないからである。表の各指示表現の下に2行ずつ並ぶ数字は1行目左が当該作品で用いられた全回数, 2行目左が過去形による地の文など本調査の対象域において筋の時点・地点を示すために用いられた回

数である。全回数を示したのは、当該作家の言語使用全般においてその指示表現がどの程度現われるかを知るためである。これらの使用回数の右側、括弧内の数字はその指示表現が平均して何ページに1回使用されているかを示すもので、1行目は全回数を本来の総ページ数（左の欄の各作品名の下に数字）で割ったもの、2行目は総ページ数から発話を表わす直接話法の割合分を減じたページ数（左の欄の総ページ数の下、括弧内の数字）で調査対象域における使用回数を割ったものである。我々にとってはこの最後の数値がまず関心の対象になる。

時間的状況定位では、『ヴェルター』における近接指示の *jetzt/nun* 「今」の使用頻度（50.7ページ毎／9.5ページ毎）は17世紀の『ジンプリチシムス』のそれ（25.7ページ毎／3.2ページ毎）と比べても1/2～1/3である。本論の(3)で我々はゲーテが地の文か会話部分かを問わず、*jetzt* の多用を嫌う傾向があることを確認した。下でも論ずるが、手紙を書いている時点を指す *jetzt* の使用が多い分、筋の時点を指す *jetzt* の使用が一層少なくなっているのではないか。さらに書簡体小説の特徴として前の手紙から数時間～数日の間に起こったことを報告するため、数週間～数年単位の明らかにそれと分かるような時間的縮約は行われず、基本的に場面的描写からなっている。¹¹⁾そしてその中で語られる出来事の量も比較的限られており、「今～した、今～した」という筋の漸進的展開に伴う *jetzt/nun* の使用が他の作品に比べ少ないと考えられる。遠隔指示の *damals* 「あの時」については、近代小説の場合主に1人称形式で使用されることを本論の(3)で確認したが、1人称形式である『ヴェルター』において *damals* が1度も用いられていないのも、直近の過去を報告する書簡体小説の特性による。

空間的状況定位では、『ヴェルター』における近接指示の *hier* 「ここ」の使用頻度（21.7ページ毎）は、21年後に書かれた『マイスター』のそれ（17.3ページ毎）より25%低く、ほぼ成立年代に見合う値になっている。一方、遠隔指示の *dort* 「あそこ」の使用頻度（76.0ページ毎）は『マイスター』のそれ（79.1ページ毎）と同レベルであるが、2回とも作中人物の移動に伴い新たな場所をまず *dort* で示す用法であることも『マイスター』以降の近代小説と共通している。

上述したように『ヴェルター』は主人公が1人称形式で書いた手紙と、それを整理し出版した編者が3人称の語り手として主人公の自殺までの最後の2週間を語る部分からなる。この3人称形式の部分は我々の今回の関心事である書簡体小説の本質部分でないため、人称形式別に状況定位表現の使用回数／使用頻度を示したのが次の表である。

	<i>jetzt</i>	<i>nun</i>	<i>hier</i>	<i>damals</i>	<i>dort</i>
1人称形式 総150ページ (122ページ)	29(5.2) 2(61.0)	46(3.3) 12(10.2)	42(3.6) 7(17.4)	3(50.0) 0(∞)	10(15.0) 2(61.0)
3人称形式 総44ページ (30ページ)	1(44.0) 1(30.0)	5(8.8) 4(7.5)	8(5.5) 0(∞)	0(∞) 0(∞)	4(11.0) 0(∞)
作品全体 総194ページ (152ページ)	30(6.5) 3(50.7)	51(3.8) 16(9.5)	50(3.9) 7(21.7)	3(64.7) 0(∞)	14(13.9) 2(76.0)

主人公が自殺を決意した時点から編者による3人称形式の語りが始まる。そこで断続的に挿入される主人公の手紙（上の表では1人称形式の部分に含めた）はもはやそれまでの手紙のような語りの性格を持たず、友人たちに別れを告げるというコミュニケーションの性格が強くなる。その結果、陳述主体である手紙を書く主人公から筋の出来事の中で行為する主人公へ状況定位の基点が移行しないため、（上の表から読み取ることはできないが）これらの手紙では過去形による地の文で近接指示の *jetzt/nun/hier* は用いられない。逆の見方をすれば、手紙は語りの性格を失うことにより発話や思考を表わす直接話法の性格に近づいてゆき（すなわち手紙を書く行為が筋の出来事を構成する行為になる）、手紙を書く主人公は語り手の性格を失うことにより筋の出来事の中で行為する主人公と同一化してゆく。

さらにやはり上述したように、書簡体小説はヴァインリヒが「説明する時制」と呼ぶ現在形や現在完了形を多用する。通常の形式の小説であれば地の文におけるこれらの時制の使用は、内的独白や一部の体験話法および歴史的現在形などの場合を除いて、語り手にとっての今を示す。書簡体小説でもそれは同じだが、作品世界に直接参加しない3人称小説の語り手や、作中人物の1人（大抵は主人公）であるが筋の出来事が完結した後に語っている1人称小説の語り手と違い、書簡体小説の語り手は今まさに筋の出来事の渦中にある。この形式の特徴は出来事から時間を置かず生々の雰囲気を報告するだけでなく、語る私が依然語られる私でもあるということである。すなわち時間的に距離を置いて冷静な報告を行う他の語り手と違い、手紙を書く主人公は筋の出来事によって引き起こされた感情の動きの中にいる。また現在形は必ずしも手紙を書いている時点だけを示すのではなく、直前の筋の時点を含めた主人公や周囲の人物の継続的な状況を表わす。それゆえ彼が恋するロッテやその弟妹たちについて現在形で報告することが多い。空間的状况定位に関しても、手紙を書いている地点（ほとんどが主人公の部屋）と筋の出来事の地点とは一致しないが、現在形や現在完了形による地の文で用いられる *hier* は離れた町にいる宛名人に対して「当地」を意味し、筋の出来事の地点をも含む。

これらの理由から書簡体小説の読者は手紙を書いている陳述主体としての主人公と、筋の出来事の中で行為している（手紙の中で報告されている）陳述対象としての主人公とを事実上区別しない。その結果、書簡体小説の場合は通常の形式の小説とは異なり、現在形や現在完了形による地の文で用いられる近接指示に際しても、読書行為において作品内世界を再構築する読者はその位置感覚の基点が筋の出来事の中にあるように感じるのである。『ヴェルター』における人称形式の違いを区別した上の表で、1人称形式の部分において使用された近接指示の全回数の使用頻度（各マス目の上の行の数値）を見ると、いずれの指示表現も過去形による地の文など本来の調査対象域における使用頻度（各マス目の下の行の数値）に対して、先の表で示した他の作品の場合よりも比較的高い値になっている。例えば *jetzt* の使用総数29回の使用頻度5.2ページ毎は調査対象域における使用回数2回の使用頻度61.0ページ毎の11.7倍であるが、『マイスター』での使用総数98回の使用頻度10.2ページ毎は調査対象域における使用回数15回の使用頻度36.9ページ毎の3.6倍にすぎない。この中には作中人物の発話や思考を表わす直接話法における使用も含まれており、直接話法以外の部分に限定すれば、*jetzt*22回（5.5ページ毎）、*nun*24回（5.1ページ毎）、*hier*31回（3.9ページ毎）となる。この値を『ヴェルター』以外のゲーテの2作品における本来

の調査対象域での使用頻度（各マス目の下の行の数値）と比較すると、jetzt と hier ではより高くなっている。¹²⁾

heute-gestern-morgen 対 dieser Tag-der vorige Tag-der nächste Tag

ヴァインリヒは『時制』でフランス語における「説明する時制」および「語る時制」と時間を表わす種々の副詞との相性を論じている。彼はアルネ・クリュムがフランス語の散文について行った計数調査を利用し、hier「昨日」／en ce moment「今」／demain「明日」のグループは主に説明する時制と組み合わせられ、la veille「前日」／à ce moment(-là)「あの時」／le lendemain「翌日」のグループは主に語る時制と組み合わせられると主張する。¹³⁾第1のグループは我々の近接指示に当たり、第2のグループは遠隔指示に当たる。この資料は我々にとって本来非常に有益なものになるはずだが、陳述主体（語り手、発話者）を基点とする状況定位表現と陳述対象（作中人物）を基点とするものとを区別せず、また地の文と発話や思考を表わす直接話法とを区別しないため、フランス語散文の様々な文脈におけるこれらの組み合わせの出現可能性を粗雑に示すものにすぎず、我々の調査結果と直接比較することは不可能である。

筋の出来事が起こる当日およびその前後の日を示す状況定位表現のバリエーションのうち『ヴェルター』において我々の調査対象域で用いられているものは、近接指示では heute「今日」、gestern「昨日」およびその形容詞形 gestrig, morgen「明日」がある。遠隔指示では当日を表わすものとして selbiger Tag/der nämliche Tag/derselbe Tag「同日」が、前日は die letzte Nacht「前夜」が、翌日は der andere Morgen「翌朝」が用いられ、それぞれ計数の対象とした。

次ページの表はこれらの状況定位表現の使用回数／使用頻度について示したものである。heute/gestern/morgen が近接指示、dieser Tag/der vorige Tag/der nächste Tag が遠隔指示である。（バリエーションが見られるものも gestern 等などの等を省略する。dieser Tag/der vorige Tag/der nächste Tag という表現は『ヴェルター』では用いられていないが、他の作品を含めて筋の出来事が起こる当日およびその前後の日を表わす遠隔指示の代表として示した。）各指示表現の下に2行ずつ並ぶ数字は、先の表と同様に1行目左が当該作品で用いられた全回数、2行目左が過去形による地の文など本調査の対象域において筋の出来事の当日およびその前後の日を示すために用いられた回数である。右側の括弧内の数字は1行目が全使用回数を本来の総ページ数（左の欄の各作品名の下に数字）で割ったもの、2行目が総ページ数から発話を表わす直接話法の割合分を減じたページ数（左の欄の総ページ数の下、括弧内の数字）で調査対象域における使用回数を割ったものである。ここでも最後の数値についてまず考察する。

『ヴェルター』における日を表わす状況定位表現の使用状況を理解する場合、2つの問題点がある。第1に1日は24時間からなり、この中に体験する私と語る私の両方が入る場合、すなわち筋の出来事における体験を主人公がその日のうちに手紙で報告する場合、当然近接指示の heute「今日」を用いる。過去形や過去完了形と組み合わせている場合は計数したが、体験する私を状況定位の基点とする真正の近接指示だけでなく、語る私を基点とするものをも計数している可能性がある。しかしこれは我々の調査が不正確であること

	heute	gestern	morgen	dieser Tag	der vorige Tag	der nächste Tag
『ジンプリチシムス』 総962ページ (695ページ)	21(45.8) 3(231.7)	15(64.1) 10(69.5)	24(40.1) 5(139.0)	77(12.5) 70(9.9)	16(60.1) 13(53.5)	4(240.5) 4(173.8)
『ヴェルター』 総194ページ (152ページ)	21(9.2) 9(16.9)	19(10.2) 2(76.0)	11(17.6) 2(76.0)	7(27.7) 6(25.3)	1(194.0) 1(152.0)	1(194.0) 1(152.0)
『マイスター』 総1002ページ (554ページ)	44(22.8) 17(32.6)	12(83.5) 7(79.1)	21(47.7) 7(79.1)	74(13.5) 60(9.2)	2(501.0) 2(277.0)	4(250.5) 4(138.5)
『親和力』 総417ページ (279ページ)	28(14.9) 9(31.0)	10(41.7) 2(139.5)	8(52.1) 4(69.8)	18(23.2) 18(15.5)	0(∞) 0(∞)	0(∞) 0(∞)
『緑のハインリヒ』 総1319ページ (1148ページ)	78(16.9) 34(33.8)	26(50.7) 17(67.5)	12(109.9) 1(1148.0)	43(30.7) 39(29.4)	1(1319.0) 1(1148.0)	10(131.9) 10(114.8)
『アメリカ』 総413ページ (274ページ)	44(9.4) 12(22.8)	6(68.8) 2(137.0)	18(22.9) 5(54.8)	13(31.8) 5(54.8)	1(413.0) 1(274.0)	3(137.7) 1(274.0)
『審判』 総335ページ (178ページ)	22(15.2) 13(13.7)	6(55.8) 1(178.0)	2(167.5) 0(∞)	5(67.0) 5(35.6)	3(111.7) 3(59.3)	3(111.7) 2(89.0)
『城』 総521ページ (226ページ)	61(8.5) 16(14.1)	19(27.4) 7(32.3)	15(34.7) 3(75.3)	22(23.7) 2(113.0)	3(173.7) 2(113.0)	1(521.0) 1(226.0)

を意味するのではなく、この現象を書簡体小説が利用していると考えべきである。また前日の体験を手紙で報告する場合は *gestern* が過去形や過去完了形と組み合わせて用いられるが、これは筋の時点から見た「昨日」ではなく、手紙を書いている時点から見た「昨日」であるため、計数していない。(全数としては計数した。) この場合も読者は地の文に近接指示が用いられていることから、報告される出来事への時間的近さを感じる。第2にこの現象は編者が語る3人称形式の部分では起こりえないため、先の *jetzt/nun-hier* 対 *damals-dort* の比較の場合と同様、人称形式別に調査する必要がある。その結果が次ページの表である。

3人称形式の部分の語り手は主人公の手紙の編者として設定され、これらの手紙の真实性を保証する存在である。彼は作品の冒頭で読者に向けた序文を記し、主人公の手紙についても5回に渡って読者のための注釈を行う。また手紙の中で人名や地名が頭文字に省略されたり、手紙の最初と最後に付き物の挨拶の部分が省略されるのも彼によるものと考えられる。しかしその語りの本質は決して歴史記述家による報告のような真正の現実陳述ではない。他の作中人物がいない時に主人公が行う独白や5ページに渡るロッテの内面の描写など¹⁴⁾、編者がどうやってそれを知りえたのか説明のつかない箇所があり、現代の読者であれば違和感を覚えるはずである。

	heute	gestern	morgen	dieser Tag	der vorige Tag	der nächste Tag
1 人称形式						
150ページ	21(7.1)	17(8.8)	6(25.0)	2(75.0)	0(∞)	0(∞)
〈122ページ〉	9(13.6)	0(∞)	0(∞)	1(122.0)	0(∞)	0(∞)
3 人称形式						
44ページ	0(∞)	2(22.0)	5(8.8)	5(8.8)	1(44.0)	1(44.0)
〈30ページ〉	0(∞)	2(15.0)	2(15.0)	5(6.0)	1(30.0)	1(30.0)
作品全体						
194ページ	21(9.2)	19(10.2)	11(17.6)	7(27.7)	1(194.0)	1(194.0)
〈152ページ〉	9(16.9)	2(76.0)	2(76.0)	6(25.3)	1(152.0)	1(152.0)

彼（ヴェルター）の考えはその道すがらこの問題に向けられた。「まったく」彼はひそかに歯がみしながら自分に言った、「これが打ち解けた、やさしく、心こまやかな、何事にも思いやりのある間柄だということのか！（中略）」

しばしば彼はその速い足どりを止めて立ち止まり、引き返そうとするかに見えた。しかし彼はそのつどまた歩みを進め、これらの考えと独り言のうちにとうとう、いわば心ならずも狩猟館にたどり着いた。（144-145ページ）

編者の語りが虚構的ディエゲシスの全知の語り手のそれと本質的に同じであり、歴史記述家による非虚構テキストではないにもかかわらず、日を表わす状況定位表現に関しては遠隔指示が優勢である（近接指示4回、遠隔指示7回）。4回の近接指示のうち3回が発話を表わす間接話法において用いられ、純粋の地の文における使用は1回であることを考えると、この傾向はますます明らかである。その唯一の近接指示 *des gestrigen Abends* 「昨日の晩」はロッテの視点から描かれた場面的描写の中で用いられている（187ページ）。また遠隔指示の全体的優勢の中で、当日を示す遠隔指示とその前後の日を示す近接指示が優勢である点は同じゲーテの3人称小説である『マイスター』や『親和力』と酷似している。

一方、1人称形式の部分では近接指示が優勢である（近接指示9回、遠隔指示1回）。唯一の遠隔指示 *selbigen Tags* 「同日」は1771年6月19日付けの手紙で用いられているが（37ページ）、この手紙はロッテとの初対面の様子を場面的描写で詳細に報告する6月16日付けの手紙で書き残した分を補うものである。多少日数が経っているだけでなく、既に前の手紙で1度報告した出来事について締めくくるものであることが状況定位表現の選択に影響したのであろうか。

手紙部分（1人称形式）における現在形や現在完了形による地の文での *heute* や *morgen*、手紙を書く時点を基点とする *gestern* をも含めた使用回数／使用頻度は、上の表の全数を示す数値（各マス目の上の行）から発話や思考を表わす直接話法での使用を除いた *heute* 18回（6.8ページ毎）、*gestern* 14回（8.7ページ毎）、*morgen* 5回（40.7ページ毎）となる。この値を先の表で示した他の作品における本来の調査対象域での使用頻度（各マス目の下の行の数値）と比較すると、ゲーテの他の2作品はおろかカフカの3作品よりも高くなっている。

擬似的ミメシス

カフカの作品を扱った本論の(4)において、我々はある作品が作中人物の視点を通した描写であるミメシスだと判断する際の(筋の時点・地点を示す)状況定位表現に関する基準として次の3点を挙げた。

- 1) 遠隔指示の *damals* 「あの時」を完全に排除する。
- 2) 場所の移動に伴う *dort* の用法を除けば、空間的状況定位の基点を作中人物に固定する。すなわち作中人物の地点を *hier* 「ここ」で指し、*dort* を使う場合も語り手からではなく、作中人物から見た「あそこ」になる。
- 3) 物語の中の主要な部分において、日を表わす近接指示が遠隔指示に対して優勢になる。

今回の調査の結果、『ヴェルター』の手紙部分(1人称形式)は筋の出来事の合間に時間的・空間的に離れていない時点・地点から報告するという書簡体小説の形式的特徴を生かし、これらの基準を満たしている。さらに手紙を書いている主人公を基点にしていることが明らかな状況定位表現をも考慮に入れると、近接指示が圧倒的優位を占める。語られる内容や語り口に関しても、直前の筋の出来事から受けた印象がまだ冷めないうちに行われた主人公による報告では、物語芸術のディエゲーシスからミメシスへの漸進的な移行に伴い本来徐々に進行するはずの「内面化・直接化」が既にかなり高いレベルで達成されていると認められる。それゆえ通常の形式の小説が依然明らかなディエゲーシス性を帯びていた18世紀に、擬似ミメシスとしての書簡体小説は「内面化・直接化」の点で物語芸術のその後の1世紀分の発展を先取りする可能性をもたらしたのである。特に通常の形式の小説においては1人称形式のミメシス化が3人称形式よりも遅れたことを考えると、書簡体小説の先進性は際立っている。

しかし擬似ミメシスとしての書簡体小説と真正のミメシス小説の違いは陳述主体の有無にある。前者は筋の時点の直後に位置する語り手による過去陳述であり、後者は筋の時点に位置する作中人物の視点を通した非時間的(非過去の)描写である。書簡体小説が示す内面性と直接性は、宛名人に向けて報告された内面性であり、筋の時点と手紙を書く時点との近さがもたらす直接性である。そのため19世紀に入ると、この形式は一部の例外¹⁵⁾を除いて忘れ去られてしまう。しかし本論の(4)でカフカの作品における枠内の物語について述べたように、ミメシスへの到達により高度の直接性・内面性を獲得した物語芸術は、20世紀における新たな展開として語り手の内省(再体験・仮定的シュミレーション)や変容など、語るという行為が持つ実存的要素に目を向ける。書簡体小説は、物語の結末を知らず、筋の出来事の中にいる主人公が語るという点でその先駆と位置付けることも可能なのである。

注

- 1) これまでに扱った作家および作品は以下の4人の7長編小説である：ハンス・ヤーコプ・クリストフェル・フォン・グリーンメルスハウゼン(1622-1676)の『ジンプリチシムスの冒険』(1671)；ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(1749-1832)の

- 『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』(1795/96), 同『親和力』(1806); ゴットフリート・ケラー(1819-1890)の『緑のハイน์リヒ』(1854/55); フランツ・カフカ(1883-1924)の『アメリカ』(1927), 同『審判』(1925), 同『城』(1926)。
- 2) フリードリヒ・ヘルダーリンの『ヒュペーリオン』(1797)も友人のベラルミンに宛てた書簡の形式を取るが、実際には過去の出来事の回想であり、その点で1人称小説に近い。
 - 3) 『ヴェルター』は主人公の手紙が編者により整理し出版されたという形を取っている。作品の冒頭(2ページ)における編者の序文の他、142-193ページは主人公の最後の様子が彼自身の手紙を交えて編者によって報告される。1人称形式で書かれた主人公の手紙は150ページ分、編者による3人称形式の語りは44ページ分を占める。なお本論の(1)~(4)では X-libris の CD テキストを使用した。今回はより多くの作家と作品を収録している Digitale Bibliothek の CD テキスト „Deutsche Literatur von Lessing bis Kafka“, 1997, Berlin を使用した。今回分析した『ヴェルター』は1787年の第2稿が収録されている。この作品における各指示表現の使用頻度を(1)~(4)で扱った作品のそれと比較するため、それらの作品に関しても Digitale Bibliothek における総ページ数を用いた。
 - 4) 『マイスター』の第6巻「ある美しき魂の告白」は1人称形式で語られ、この作品の中でも特に際立って語り手の存在が表現形式に現われている部分であるが、そこでの語り手による自らの語る行為への言及は28回(3.6ページ毎)であり、『ヴェルター』における頻度はこれをも上回る。
 - 5) 我々のテキストでは194-195ページに収録。
 - 6) ハラルト・ヴァインリヒ『時制—説明された世界と語られた世界』。36ページ。
 - 7) 同上、36-37ページ。傍点は原著者による。
 - 8) 同上、67ページ。
 - 9) ヴェルターは12月22日の深夜12時まで手紙を書いているが、12月21日の朝から断続的に書き足されたと編者が報告するこの手紙には日付がない。
 - 10) 注3に示したように今回から使用する CD テキストを X-libris から Digitale Bibliothek に替えたため、各作品の総ページ数は本論の(1)~(4)で用いたものと異なり、それを使用回数で割った使用頻度も(1)~(4)とは異なる値になっている。またグリーンメルスハウゼンの『ジンプリチムス』は Digitale Bibliothek に収録されていないが、他の作品の場合 Digitale Bibliothek における総ページ数は X-libris のそれの0.83~0.85倍であるため、X-libris における1145ページを0.84倍した962ページとして計算した。
 - 11) 第1部の最後の1771年9月10日付けの手紙の後、ロッテから離れて公使館での官職に付いてから、既に結婚した彼女の傍へ再び戻り、夫のアルベルトを殺してでも彼女への思いを遂げたいという絶望的な心理状態になる1772年9月3日付けの手紙までの時期は手紙の間隔が最大40日になる。(平均16.3日、それ以前は平均3.1日、それ以後は平均3.8日。)しかしこの時期の手紙も直前に起こった出来事や現況を報告するものであり、何週間にも渡る時期を時間縮約的に報告することはない。
 - 12) 現在形や現在完了形による地の文で用いられる遠隔指示の *damals* や *dort* は、場所の移動に伴って用いられる *dort* が筋の出来事の地点を指す場合を除き、書簡体小説に

おいても語り手（手紙を書いている主人公）の時点・地点を指していない。

- 13) 上出, 226-228ページ。ヴァインリヒが示した表を以下に引用する。

	説明する時制群	語る時制群
hier「昨日」(avant-hier「一昨日」を含む)	80	33
en ce moment「今」	37	5
demain「明日」	81	7
la veille「前日」(l'avant-veille「前々日」を含む)	0	12
à ce moment(-là)「あの時」	19	48
le lendemain「翌日」	16	91

ヴァインリヒはこの表の横方向の比較, すなわちそれぞれの時間的副詞がいずれの時制群と主に組み合わせられるかを問題にしているが, 縦方向の比較, すなわちそれぞれの時制群がいずれのグループの時間的副詞を選択するかを問うこともできる。この表によれば, 例えば語る時制と遠隔指示の à ce moment(-là)「あの時」の組み合わせ(48回)は近接指示の en ce moment「今」との組み合わせ(5回)の9.6倍の頻度で起こる。これは近代小説に関する我々の調査結果とは正反対の結果であり, クリュムの調査対象に非虚構テキストが多く含まれていることを推測させる。Klum, Arne: *Verbe et adverbe. Etude sur le système verbal indicatif et sur le système de certains adverbess de temps à la lumière des relations verbo-adverbiales dans la prose du français contemporain*. Uppsala 1961.

- 14) 主人公がロッテの夫のアルベルトに拳銃を貸してくれるよう依頼する手紙を書いてから, 拳銃を借り受けた従僕が彼のもとへ戻ってくるまで(182-187ページ)。その最初の部分は彼女の心情を慮る語り手の自問が体験話法へと移行してゆく。

彼女(ロッテ)の普段は清らかで軽やかに流れる血が, 憤りの余り燃えるように熱くなっていた。様々な思いが美しい心を引き裂いた。彼女が胸のうちに感じていたのはヴェルターを抱擁がかき立てた炎だったのか? 彼の不躰なふるまいへの怒りだったのか? 何ものにもとらわれず自由で無邪気に過ごし, 何の不安もなく自分自身を信頼していたあの頃と現在とを比べて覚える不快な感覚だったのか? 彼女はどのように夫を出迎えるべきだったのか? 告白して差し支えないにもかかわらず, その決心がつかないあの場面を彼女はどのように打ち明けるべきだったのか? 彼らはこんなに長い間互いに沈黙し合ってきた。彼女が最初にこの沈黙を破るべきだったのか? それもこれほど不適當な時に, また夫にとってこれほど思いがけないことを打ち明けるべきだったのか? ヴェルターの訪問を受けたと聞くだけでも夫は不愉快な印象を持つだろうと彼女は恐れていたのに, その上この思いがけない破局を伝える! 夫がそれをまったく正しく判断し, 何の偏見もなく受け止めてくれると彼女は期待できたのだろうか? そして彼が彼女の心のうちを読み取ってくれると彼女は望むことができたのだろうか? そうかといって, その前ではいつもクリスタルガラスのように何も隠さず率直に打ち明けてきたし, 彼女の気持ちを一度たりとも隠さず, また隠すことなどできなかった夫に対して, 彼女はしらばくることができたのだろうか? 様々な考えが彼女を不安にし, 困惑させた。(182-183ページ)

「彼女」を「私」に、過去形を現在形に置き換えてみれば、「彼女はどのように夫を出迎えるべきだったのか？」から「彼女はしらばくれることができただろうか？」までを体験話法とみなしうることが分かる。

15) ヴィルヘルム・ラーベの『大きな戦争の後で』(1861) など。

参考文献

- Hamburger, Käte: *Die Logik der Dichtung*. 2., sehr stark veränderte Auflage. Stuttgart 1968 (1957).
- Petersen, Jürgen H.: *Erzählsysteme. Eine Poetik epischer Texte*. Stuttgart 1993.
- Stanzel, Franz K.: *Theorie des Erzählens*. 3., durchgesehene Auflage. Göttingen 1985 (1979).
- Tarot, Rolf: *Narratio viva. Untersuchungen zur Entwicklungsgeschichte der Erzählkunst vom Ausgang des 17. Jahrhunderts bis zum Beginn des 20. Jahrhunderts*. Band 1. *Theoretische Grundlagen*. Bern 1993.
- Weinrich, Harald: *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*. 3. Auflage. Stuttgart u. a. 1977 (1964).
- 阿部吉雄：「ディエゲーシスからミメシスへー虚構言語における状況定位表現の歴史的変遷(1)具体的作品(ゴットフリート・ケラーの『緑のハイネリヒ』)による理論の検証」、『独仏文学研究』(49) 1999年, 九州大学独仏文学研究会, 23-34ページ。
- 阿部吉雄：「同(2)17世紀のディエゲーシス的テキスト(グリムメルスハウゼンの『ジンプリチムスの冒険』)」、『言語文化論究(メディア空間・言語情報特集号)』1999年, 九州大学言語文化部, 53-65ページ。
- 阿部吉雄：「同(3)1800年前後のディエゲーシス的テキスト(ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』と『親和力』)」、『独仏文学研究』(50) 2000年, 九州大学独仏文学研究会, 47-59ページ。
- 阿部吉雄：「同(4)ミメシスへの到達(カフカの『アメリカ』、『審判』、『城』)」、『言語文化論究』(12) 2000年, 九州大学大学院言語文化研究院, 1-14ページ。

Von der Diegesis zur Mimesis

— Die historische Entwicklung der Zeit-Raumdeixis in der fiktionalen Sprache —
(5) Briefroman als Quasi-Mimesis

Yoshio ABE

Die Ausdrucksform des Briefromans ist infolge der Parallelität zu ihrem nicht-fiktionalen Modell des Briefs als typisch diegetisch anzusehen. Denn sie macht zum einen durch häufigen Gebrauch von Präsens und Perfekt, d.h. der Tempora, die den jetzigen Zeitpunkt des Adressanten implizieren und zum anderen durch die den Kommunikationscharakter des Texts unterstreichenden Anreden an den Adressaten des Briefs, die Anwesenheit des Erzählers unverkennbar. Allerdings werden in den meisten Briefromanen die Begebenheiten als zeitlich kurz zurückliegende Handlungsabschnitte erfasst und von einem räumlich nicht weit entfernten Ort her berichtet, so dass in der Darstellung die Nahedeiktika bevorzugt werden. In dieser Hinsicht weisen die Briefromane eine große Gemeinsamkeit mit den mimetischen Romanen auf, und zwar darin, dass die Handlungsbegebenheiten durch die Figurenperspektive dargestellt werden.

Dieses Phänomen lässt sich wohl mit der Doppelrolle des Erzählers im Briefroman erklären. Die Figur, die zwischen den Handlungsbegebenheiten ihre Briefe schreibt, spielt zwar die Rolle des Erzählers, verharret aber auf der Handlungsebene und steht noch unter dem frischen Eindruck, den die eben erlebten Begebenheiten bei ihr hinterlassen haben. Ihr Schreiben ist nicht nur Erzähl-, sondern auch Handlungsakt, der wie die direkte Rede oder der innere Monolog die Handlung eines Romans gestaltet. Aus diesem Grund war es im Briefroman möglich, die „Innerlichkeit und Unmittelbarkeit“ der Darstellung, die in der Entwicklung der Erzählkunst von der Diegesis zur Mimesis bis zum Anfang des 20. Jahrhunderts schrittweise erreicht wurde, bereits im 18. Jahrhundert auf dem hohen Niveau zu verwirklichen.

An diesen quasi-mimetischen Eigenschaften des Briefromans ist zu erkennen, warum diese Gattung in der Geschichte der Erzählkunst zeitweise eine beliebte Form war.